

「虹のメタファー」から多文化共生を再考する
—移動する華人やチャイナタウンを事例として—
Rethinking Multicultural Coexistence through “Rainbow Metaphor”
-The case of Chinese Migrants and Chinatowns-

陳 天璽

Key words : Rainbow Metaphor, Chinese Migrants, Multicultural Coexistence, identity, China town

Chinese migrants are often perceived as having strong exclusive networks of fellow Chinese that they can utilize to expand their business globally. Some of the previous studies have characterized these networks by labeling them as “The Bamboo Network” or “The Chinese Commonwealth”. Each of these characterizations implies that Chinese are utilizing their ethnic connections to expand their businesses. It also implied that the Chinese Network is a threat to non-Chinese.

These studies tend to project an image of the Chinese network is strongly knitted based on “Chinese” bonding. These studies, however, usually fail to carefully explain the exact nature of self-identities that Chinese migrants hold, and how those identities and self-perceptions influence them in their daily lives as well as in their business behavior.

Through case studies of Chinese migrants and Chinatowns, this paper examines the characteristics of the trans-national nature of Chinese entrepreneurs by analyzing the individual multi-identities of Chinese migrants and how these trans-national characteristics may project an image of a “Chinese Network”. Since individual identities affect personal activities and social relations, by understanding how Chinese entrepreneurs perceive themselves, we can better understand this “network” that they form.

I will use the symbolism of a “rainbow metaphor” to describe the characteristics of the multi-identities of Chinese entrepreneurs and the perceived “Chinese Network” that they formed. Through what I will call the “rainbow” networks and multi-identities, I outline the differences between the image and the reality of these networks and the identities of Chinese entrepreneurs. This rainbow metaphor will help us to understand the dynamism and complexity of the world of Chinese. Also, it may give us some hints for us to construct the multicultural coexistence society.

はじめに

長崎、神戸、横浜など、日本では古くから港町にチャイナタウンがある。華僑・華人¹と呼ばれる中国系移民が多く暮らしているチャイナタウンは、観光地としても有名である。

¹ 日本で中国系移民を表現する際にしばしば使われる華僑の「僑」は仮住まいという意味をもっており、中国国外に定住する中国系移民で、国籍は中国を維持している人を指す。一方、「華人」という場合は、居住国の国籍など中国以外の国籍を取得した中国系移民を指している。

美味しい中華料理が食べられ、異国情緒あふれる街の雰囲気は、日本人にとっては「身近な外国」であるといえる。横浜中華街に関していえば、年間 2300 万もの人が訪れ、観光シーズンになると「行きたいところのトップ3」に挙げられ、ディズニーランドと並ぶ人気な「テーマパーク」と化している。

しかし、「チャイナタウン＝中華料理のテーマパーク」とするのは少々短絡的すぎるように思う。チャイナタウンになぜ料理屋が多いのか。なぜ食べ歩きをさせる出店が増えたのか。それはみな日本社会との深いかかわりに起因している。街に暮らす人々と触れ合い、歴史をたどると、さまざまな姿をしたチャイナタウンがみえてくる。また、それは多文化共生の素顔をみることにもつながるはずである。本論文では、華僑・華人、そしてチャイナタウンを通して、多文化共生へのヒントをつかみたい。そのなかで、「虹のメタファー」を通して考えていきたい。

日本と西洋のハブとしてのチャイナタウン

まず初めて、なぜ、日本にチャイナタウンができたのだろうか。

その歴史はおよそ 150 年前までさかのぼることができる。日本は、江戸幕府のもと鎖国政策を行っていたが、1859 年（安政 6 年）、日本とアメリカの間に結ばれた日米修好条約によって日本は開港することとなり、それに伴って諸外国の人や文化が日本に流入することとなった。まず、長崎、神奈川、函館が開港され、その約十年後、神戸と大阪も開港された²。日本の港は、欧米の人々にとって「極東の貿易港」として魅力的であり、アメリカやイギリス、フランスなど多くの外国人をひきつけた。開港に伴って流入する外国人には、一定の区域内での居住や商業活動を認める「居留地」が設けられた。

来日した欧米商人の多くは、すでに中国の開港場で貿易に従事していた人々であり、彼らは、香港や広東などの商館で交流のあった中国人の買弁（貿易の仲介を行う人）を同行させた。西洋人と日本人は、言葉が通じなければ、お互いの商習慣にも不慣れであったため、漢字によって日本人と筆談でき、すでに西洋人と商売をしていた中国人は、必要不可欠な存在であった。また、買弁だけではなく、洋館のペンキ塗装、洋服仕立て人、理髪師、コックなど、日本ではまだ人材のいなかった分野の仕事に従事する中国人が、西

写真 1 20 世紀初頭の横浜中華街



（写真資料：横浜開港資料館所蔵）

² 長崎は、1571 年に貿易港として外国人に開かれており、その頃より、盛んになった唐船貿易によって、中国人が長崎に住み着いていたとされる。しかし、徳川幕府のもと鎖国政策が実施されると、出島に唐人屋敷が設置され、新規の中国人の流入は厳しく制限された。

洋人に伴って来日した³。

開港以後、横浜居留地の整備が進むなかで、海岸通りやメイン・ストリートの本町通りには、西洋人の商館が立ち並び、中国人は本町通りの後方で、あとから作られて居留地となった旧横浜新田あたりに、ぽつぽつと店を開き始めた⁴。交易の拡大に伴って人々が増えるにつれ、居留地のなかに互助組織である中華会館や同郷会、関帝廟や劇場などの中国的な建物、そして中国人が営業する商店が増え現在のチャイナタウンの原型が形成された。なお、当時の写真にみられる看板からもわかるように、チャイナタウンは、理髪、トイレットペーパーやピアノメーカーなど、西洋人の生活に必要とされていた業種の店が多かった（写真1）。西洋人の流入に伴って、日本には多くの近代技術・文明が伝わったが、その際、中国人を介して伝えられたものが少なくなかった。そういった意味で、開港当時のチャイナタウンは、中国人が集住する地というよりも、西洋と日本をつなげるハブとして重要な機能を有していた街として見る視点が実は大切である。

ハブを形成する虹の存在

私の博士論文のなかで提示した「虹のメタファー」⁵についてご紹介したい。同時に、本シンポジウム⁶や国立民族学博物館でおこなってきた私たちの共同研究会⁷のテーマである越境や身分証明、アイデンティティなどを意識しながら、考えていきたい。私がここで言う「越境」とは、一つはトランスナショナル、つまり国境という物理的なボーダーと、もう一つは華僑・華人たちの「世界」に存在する精神的なボーダーを越えることを指している。移民である華僑・華人にとって、国というボーダーのみならず、いろいろなボーダーがあり、それは例えば地域的なものであったり、従事する職業であったり、言語や文化であったりと、さまざまな形で自分のアイデンティティを規定するものを指す。そうしたものを時と場合によって越境し、ネットワークを築いて生きている華人たちに注目したい。また同時に、そんな華人を「見つめている人たち」（多くの場合は社会の多数派や華人でな

³ 日清修好条約が締結される1871年まで、日本政府にとって、中国人は無条約国の人であったが、必要不可欠な存在であったため、「西洋人付属の中国人」として、その滞在を認めていた。

⁴ 西川武臣・伊藤泉美『開国日本と横浜中華街』大修館書店、2002、81-83頁。

⁵ 陳天璽『華人ディアスポラ—華商のネットワークとアイデンティティ』明石書店、2001。

⁶ 本国際シンポジウムは、長崎大学「東アジア共生プロジェクト」及び国立民族学博物館共同研究会「人の移動と身分証明の人類学」の共催のもと、2014年2月9-10日、長崎大学で行われた。なお、筆者は、「東アジアにおける人の移動と多文化共生—身分証明に着目して」というタイトルで発表を行い、本論文は、その口頭発表内容に加筆を行ったものである。

⁷ 国立民族学博物館共同研究会「人の移動と身分証明の人類学」、平成23年10月1日から平成27年3月31日まで、人類学、社会学、歴史学、法学など、多様な分野の研究者とオブザーバー参加者25名ほどで組織された研究会（研究代表：陳天璽）。パスポートをはじめ、さまざまな身分証明書や人の移動に着目した。

い人たち)をも意識している。つまり、華人だけではなく、華人を観察している人たちの華人を見つめる眼差しをも分析対象としている。それは私が提示する「虹のメタファー」で表すことができ、なぜ虹かというところに他者の華人を「見つめる目」というものが関係してくる。対象と観察者のダイナミズム、つまり可変的であるという点も捉えていきたい。

華僑・華人は、海外に散在している中国人たちを指す。日本で聞き慣れた言葉である華僑の「僑」の字は、仮住まいという意味がある。よって華僑とは、中国の国外に一時的に在住している人たちのことを指す。学術的には国籍で区別しており、依然として中国国籍を保持している人たちを華僑、それに対して、中国の血統を持つが、中国の国籍を失い、居住国国籍も持っている人たちを華人と呼んでいる。かつては華僑が多く、日本でも90年代はじめまでは華僑という語が海外の中国人を指す語として主に使われていたのだが、最近では居住国の国籍を持っている人たちが多くなったこともあり、華人という言葉が頻繁に使われるようになってきた。なお、より包括的には華僑・華人と呼んだり、あるいは華人のみでも海外の中国人を表す言葉として、使われるようになってきている。

華僑・華人はしばしば「お金持ち」や「さまざまな国、どこに行ってもチャイナタウンがある」、さらには「一定の経済力を持っている」というようなイメージが持たれている。そういったイメージは、多くはビジネスマンに対して抱いているものである。けれども華僑・華人の人たちのすべてがビジネスマンなのではない。学者や芸術家などもおり、華僑・華人みなビジネスをしているわけではない。イメージとして持たれている「お金持ち」だとか「ネットワークを持っている」というのは、華人ビジネスマンに対して持っているイメージであり、それが華人全体に転化されているといえる。私は、この点は、はっきり分別すべきであると考えている。よって彼らを、華商と呼ぶようにしている。華商といった場合、華僑・華人のなかでも特にビジネスに従事している人たちのことを指す。ここでは、この華商たちを見ることによって、そのネットワークというのがどういうものなのか、アイデンティティはどのようなものなのかというのを見ていく。

もう一つはトランスナショナルな活動である。マレーシア華人や、シンガポール華人、香港華人などは、彼らが居住する国・地域のなかだけで活動しているわけではなく、国境(境界)を越えて他国・地域にいる華人とつながっている。それは自らがチャイニーズだというアイデンティティがゆえ、トランスナショナルな活動ができていないかと思われている。

さらに、エスニックの排他性である。華人ネットワーク、もしくは華商ネットワークというように、中華の「華」の字で仕切られているので、「ほかのエスニック・グループは入れないのではないか？」というようなイメージが持たれている。90年代以降、中国の市場がますます成長するにしたがい、中国だけではなく台湾、香港、シンガポールなどを結ぶ大中華経済圏、さらには世界各地に散らばっているチャイニーズ・ディアスポラが繋がったら、それはひとつの排他的な経済圏を作るのではないのかというような議論も湧き出た⁸。

そういったなか、チャイニーズの二世として日本に生まれ、当時大学生だった私は、「も

⁸ 森田靖郎『華人資本主義の衝撃』PHP、1995。

しかしたらそのネットワークに入ることができたら、何か自分も財を成せるのではないか？もしくは、すごいつながりが持てるのではないか？」と軽率な思いに駆られリサーチをはじめた。大学院に入り、華商ネットワークをテーマに選び、香港に留学した。留学中、新聞や雑誌を含め、またインタビューやフィールドワークを通し多くの一次資料を見つけることができた。例えばフォーブスなどには、その年の華商トップ 500 など数多くの名前が並んでおり、所有している会社、その場所、資産などリストが多数上がっていた。多くの資料を収集することができ、どんなネットワークがあるのか、どういった特徴があるのかというのを、彼らに対するインタビューを通して見て行こうと考え、研究を始めた。

私は、香港を初め、東南アジアはマレーシア、シンガポール、タイをフィールドとして調査を行った。当時は、ビザの関係などもあり、インドネシアには入れなかったのだが、インドネシアの華人とは香港やシンガポールで会い、インタビュー調査を行った。アメリカ滞在中には、アメリカ、カナダ各地のチャイニーズのビジネスマンにインタビュー調査を行い、ヨーロッパでは、フランスとイタリア、イギリスで調査をした。

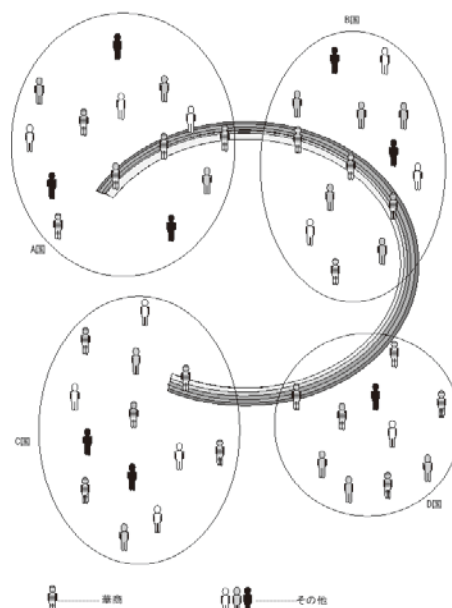
研究を続けていくうちに、世間で華人に対して抱いている排他的なイメージと、実際の華人たちとは「なにかが違う」と思った。華人のネットワークといわれているが、華人ネットワークのみでこれを斬ることができるのか。華人ネットワークというのであれば、彼らが同じチャイニーズとしてのアイデンティティでつながっていて、はじめて華人ネットワークといえるのではないかと思った。そこでアイデンティティとネットワークのつながりを分析しはじめた。

(図1)では、A国、B国、C国、D国と、大きな円が国のボーダーを表している。そのなかでさまざまなエスニック・グループが暮らしている。A国をマレーシアとした場合、そのなかにはマレーの人もいればインドの人もおり、チャイニーズもいる。場合によっては一時的に居住しているほかの国の人もあるだろう。B国も同様である。そのなかにいる人形をそれぞれ白、黒、灰色、縞模様としたが、それぞれの人形はちがう民族を表しており、縞模様はチャイニーズを指す。そして先ほどの華人ネットワークのイメージを使うならば、彼らはトランスナショナルにつながりを持っていると見られている(図2)。私はこれを虹のネット

図1 国々と多様な人々



図2 華人ネットワークのイメージ



ワークと呼んでいる。

「虹のメタファー」とは

ところで、なぜ虹かという、虹が形成されるためには、水滴と光というのが非常に重要になる。まず、水滴が必要である。一人一人の華人が、すべて水滴と見ることができる。その理由として、まず、華僑・華人が外に出るためには、中国語で「出洋過海」といって、海を越えて出て行かなければならない。海を越えてディアスポリックにいろいろな国に移民するという意味で、海という水の要素がある。また、華僑・華人が現地に行くと、一朝一夕に経済力をもったわけではなく、日々勤勉に働いてやっと財を成した。よって働いて流す汗という水の要素が存在している。さらに、彼らが移民し、ディアスポリックにいろいろな所に散らばっている。その場合、故郷や家族と離れて生活することになる。居住国でマイノリティとして生きる時、さまざまな苦勞をする。そのなかで彼らが流す涙という意味で、もうひとつの水の要素が現れてくる。つまり華人を海、汗、涙にたとえる水滴と見ることができる。

次に、光というのは、社会のマジョリティや外部の人が「見つめる目」を指している。見つめる人たちが注目すること、それが光の要素になっている。ある程度成功したら「光宗耀祖」、つまり自分たちの功績で祖先を輝かせようという意欲から放つ光がある。また、フィールドワークでは、華商大会など大きな大会の際に、旦那様がきちんと奥様を連れてくるのを見かけるが、その奥様は、往々にして非常に綺麗で、着飾っていて、そしていかにも裕福であることを見せ付けるかのように大きな宝石をつけていたりする。さらに、移民たちは、当初社会的信用が形成されていない場合や差別や軽蔑を打破するため、あらかじめ金物を身につけることによって所有を顕示し信用を確保したり、もしくは何か非常事態が起こった際、逃げてお金に換えられるようなものを身につけておくというような考え方もある。そういった意味で華人が自から放つ光もある。

光が水滴にあたり虹が現われる。そして、虹は通常七つの色など、多様な色で形成されている。私はその多様な色を華人が持っているアイデンティティ、もしくは彼らが持つアイデンティティから派生するネットワーク、社会的な関係というものに喩えている。また、先ほど触れた光の要素であるが、見つめる角度というのも、虹のネットワークを理解する要素として非常に大切である。こうしたさまざまな要素が重なり、虹のネットワークが形成され、非常にトランスナショナルなチャイニーズのネットワークが現れる。

しかし、本当に華人たちにはネットワークがあるのだろうか。インタビューを通し華人たちに彼らのアイデンティティについて聞いたり、アンケート調査を行い、彼らがどのようなアイデンティティを持ち、ビジネスをする際にどのような人たちと関わりを持っているのかを分析し分かったことは、必ずしもチャイニーズの人たちだけでビジネスが成り立っているわけではないということである。むしろ、チャイニーズではない人たちとのネットワークの方が強い場合も多いということが見えてきた。

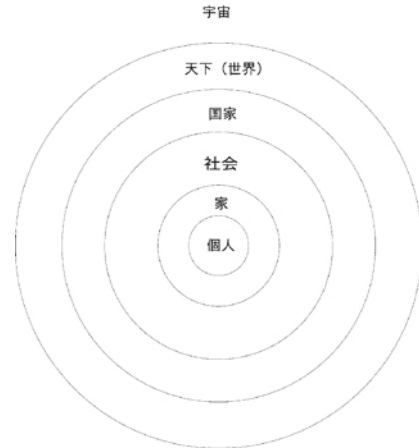
人のつながりを形成するもの

彼らのトランスナショナルな活動、もしくはトランスボーダーな活動を見る時に大切なものに「関係（グアンシー）」がある。中国の人たちは人間関係を「関係」というが、その

「関係」ネットワークというのがビジネスや物事を遂行する際に大切となる。「有関係就没関係。没関係就有関係」ということがしばしばいわれる。中国語で「関係」の前に「没」という字がつく「没関係」という言葉は「大丈夫」という意味である。日本語に訳すと「関係がないと問題になり、関係を持っていれば大丈夫だ」となる。つまり、ネットワークや個人的な関わりなど、人脈をたくさん持っていれば、どこに行っても問題はない。しかし反対に、何人も人脈やネットワークを持っていなければ、どこに行っても問題にぶち当たって何もできなくなるという意味だ。チャイニーズの人たちの間では、「関係」というもの、いわゆるコネクションを持っているかどうか、重要であるといえる。また「関係」の次に、信用できる人間かどうかというのが、ビジネスのなか大切にしているものである。私が収集したアンケートでは、約7割の人が「関係」と「信用」の二つがないと、ビジネスは成り立たないと答えている。

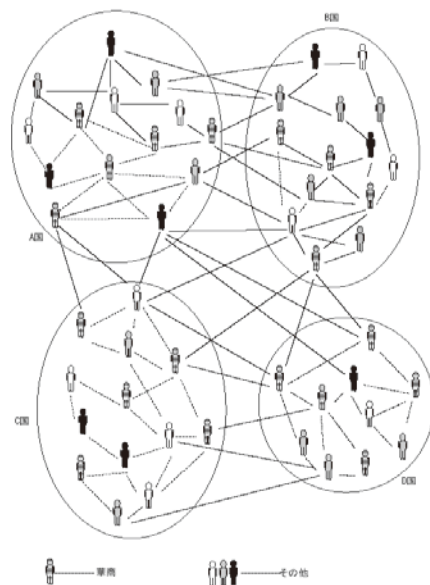
さらに、華人のネットワークを理解するため、華人の世界観を見る時に大切なのは、倫理精神である。徳教というマレーシアのチャイニーズの間で信仰されている新興宗教などでは、天と人が一つになることが説かれており、人と天との関わり方というのが非常に興味深いテーマとなっている。いろいろな宗教のなかで信仰されているものがひとつに重なり合うこともある。そこでは自分と天、そして世界というものの関わり方が非常に重要になる。自分を図で表すと(図3)のようになる。個人を中心に置き、家、そして社会、国家、世界、さらには宇宙、そういったものを意識しながら自分のアイデンティティ、そして社会的関わりというものが形成されているように思われる。

図3 個人と世界



そうした関係のなかで、彼らの日常の関わり合いは、(図4)にみられるように、必ずしもチャイニーズのみとの関わりに限らない。例えば、先ほどの社会、国家といった時、マレーシアのチャイニーズの場合は、マレー人との関わりも持っているし、インド人との関わりもある。そしてマレーシア人というマレーシア国民としての意識もある。エスニックな華人という意識だけでなく、シンガポール華人やインドネシア華人との間では、同じ中国系ではあるが、私はマレーシア人、あなたはインドネシア人、あなたはシンガポール人というような違いも意識しながら生活をしている。

図4 人々のかかわり



しかしながら我々は、これまで華僑・華人について見る場合、多くは中華、もしくは「華」という傘にかぶさったものばかりを見がちであった(図2)。華人ネットワークに関しても、彼らのエスニックな血のつながりというものばかりを意識していた。よって、中国、

あるいは中華を彼らの「世界」にしてしまい、その持つ 内向きなネットワーク (図5) ばかりに注目してきた。華人社会をみる際に、注目されてきたネットワークは、主に三縁関係といわれている。

三縁関係の一つ目は、血縁のつながりである。華僑・華人社会のなかで血縁と言った場合、第一に家のつながりをいう。陳氏なら、陳氏宗親会といって、陳という苗字を持った人たちの宗族の集まりがある。それを血縁と呼ぶ。

二つ目は地縁である。これはどこの人であるのかを示している。それぞれの地域によって言葉が異なり、習慣も異なるので、それぞれの地域ごとに同郷会というのがある。それぞれに違ったネットワークを持っている。例えば、タイに多い潮州系のネットワークでは、シンガポールや香港などほかの地域にもディアスポリックに分散している。タイでは、米は潮州系ネットワークが握っていたといわれている。また、香港の海産物も潮州系ネットワークが握っており、福建系などはそのネットワークには入れないと聞いている。また、マレーシアでは、地縁によって従事するビジネスが異なっており、カフェを開いているのは福建系、ビジネスをしているのは潮州系、重労働、もしくは教育に従事しているのは客家系、というふうに住み分けがなされている。このように、華人の世界には地縁も一つの特徴となっている。

三つ目は、業縁である。地縁のなかで紹介したように、業種も棲み分けがされている。潮州系なら米、カフェを営んでいるのは福建というように、地縁と重なった業種の棲み分けがされている。こうした特徴があるので、これまで華人の研究をする場合、華人のなかでも福建系住民の研究をし、福建系ネットワークを追って行くという形態がとられ、内向きな視点が主であった。

しかし、華人の今のネットワークは非常にトランスナショナルになっている。一世代前であったらその三縁関係で分析できたものも今では、また様変わりしているのではないかと、リサーチの過程で感じた。そこで先ほど (図5) で表したいろんな円は、個人と世界の間を表現しているが、華人を見る場合は、その世界を中華とするより、グローバル社会をベースにした認識が重要なのではないかと考えた。それは個人を中心に、家のつながり、出身地のつながり、どの国に住んでいるか、どの国の国民となっているかという居住国とのつながり、さらに中華という世界とのつながりなどである。この中華というのは、普通に意識される中国という国ではなく、より広い文脈で、台湾や香港の中国人

図5 内向きの世界観

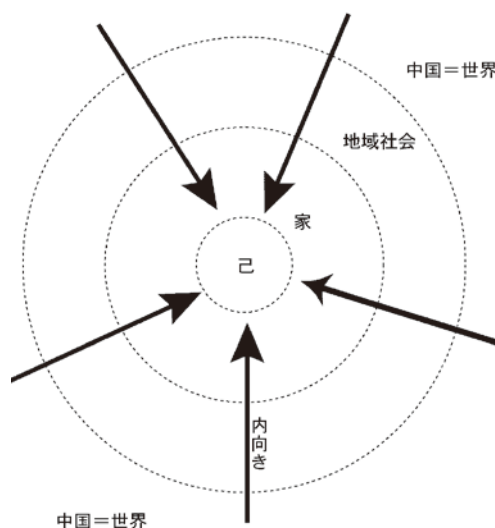
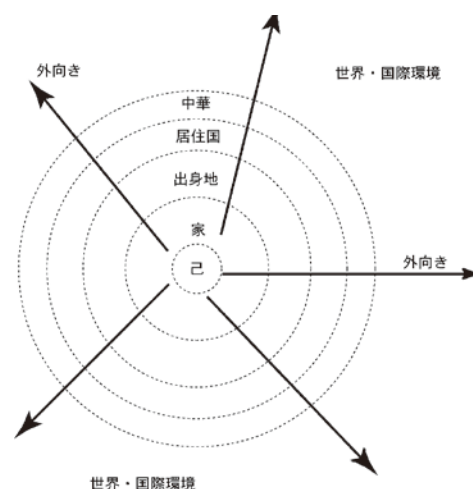


図6 外向きの世界観



社会、世界各地に散在している中国系の人たちをひとまとめにする中華文明としての中華世界を指している。これ以外にも、さらに今日の情報社会など、グローバル社会とつながった世界というものがあるだろうと考えている（図6）。

華商大会の事例

では具体例として、「華人ネットワークがある」と考えられるようになった原因の一つでもある世界華商大会についてみてゆきたい。華僑・華人の企業家が世界から集まるこの会議は、1992年から隔年行われるようになった。バンクーバーで大会が行われた際、カナダで当会の副会長に会いインタビューを行った。「カナダ企業と中国本土の企業の間ではたくさんビジネスは成立したが、華人企業は橋渡し役でしかない」と話していたのが印象的であった。オーストラリアの華商大会では、韓国チャイナタウン構想が目玉となった。その発案者は韓国政府の関係者である。当時、韓国は成長市場である中国からの観光客を増やしたかったのだろう。そこで華僑・華人の協力を得ようと華商大会に参加し、韓国への投資を呼びかけたのである。そんななか、華商大会のプロジェクトに関わっていた韓国人の依頼で、在日コリアンの人が日本における韓国への投資家を探すため同じパチンコ業界の日本人の友人の奥さんに、この韓国チャイナタウン構想について話しをした。その奥さんは在日華僑であった。自分は料理屋を経営しており大きな資金がないため、各国を跨いでビジネスをしている弟にこのプロジェクトについて話をした。すると、その弟は、投資する価値があるかを見極めるため、すぐに韓国へ渡り現場を見に行った。ビジネス情報に対応する柔軟性やスピード感は目を見張るものがあった。その後、実際に投資を行ったかどうかは定かではないが、いろいろなつながりを通し、弟が投資の現場を見に行った事実一つをとってもわかるように、ネットワークの柔軟性や実行力に加え、彼らのネットワークは華人のみならず、同業、家族、チャイニーズ、コリアン、日本人、オーストラリア人などいろいろな人のつながりや「関係」が入り組んでいるのが分かる。

私のフィールドの一つである横浜中華街の暮らす人たちを見ても、日本人、華人、コリアンを問わず、同じ中華街に暮らす人としてアイデンティティを共有している。彼らは中国の文化も日本の文化も維持し、生活のなかで共存させている。例えば家の神棚でも、中国、日本、西洋の宗教を喧嘩させずに共存させているのが実態である。華僑・華人たちの家で使っている言葉や食事などにも同じような現象を伺うことができる。つまり、多くの場合「チャンポン」状態となっているのだ。

チャイナタウンの事例

次は、チャイナタウンの事例に着目したい。日本のチャイナタウンは、つねに今日のように「中華料理のテーマパーク」というような雰囲気を持っていたわけではなかった。第二次世界大戦後、チャイナタウンは日本の他の地域と同様、廃虚と化していた。その後、チャイナタウンには、米軍や船員など西洋人を対象とした「外人バー」が立ち並ぶようになった。夕方になると、ネオンが付き、店先の赤いビロードのカーテン越しに、妖艶な女性が座っている光景は私の幼少期の記憶としてまだ鮮明に残っている。70年代ごろまでは、日本のチャイナタウンも、夜は危険な雰囲気が漂っていた。神戸のチャイナタウンも「昼は市場、夜は外人バー」の街だったようだ。夜になるとセーラー服や軍服の欧米人がひし

めいた。欧米人が多いというよりも、欧米人しかいなかったそうだ。チャイナタウンというのは名ばかりで、中国的な雰囲気はまるでなかった。

しかし、1980年代になると、日本の各チャイナタウンでは街づくりに着手し、街のイメージ刷新に力を入れたのである。横浜では横浜中華街発展会協同組合、神戸では神戸南京町商店街振興組合などが結成された。こうした組織は、いわゆる街の振興組合であり、メンバーは華僑・華人に限られてない。華僑・華人コミュニティは通常、三縁関係、つまり、同郷、同姓、同業をもとにした組織が多いのだが、日本では華僑・華人人口が少なかったこと、そしてコミュニティが日本人の消費者を対象にしていたことなどから、華僑・華人の間での親睦団体はせいぜい同郷会ぐらいで、あとはチャイナタウンの街づくりと発展を中心課題としている上述のような組織が、むしろ求心力を持つようになるのであった。チャイナタウンで店を経営している人、かつ、チャイナタウンの発展と振興を願うものであれば、華僑・華人でなくとも参加することができるのである。

こうした組織を中心に、街の道路や地図、各種モニュメントの整備・構築を行った。またそれだけではなく、店の業種や営業内容なども規制し、街全体の雰囲気づくりにも気をつかった。神戸を例に挙げると、街に立ち並んでいた「外人バー」は一掃された。また、現在の南京町の中心部は、広場に中国風の東屋があり獅子舞など各種イベントの会場になっているが、かつては小さな店が入り組んでおり、今の雰囲気には程遠かった。道路幅を広くし、牌樓の門を設置するなどを通し、ようやく安全かつ中国情緒が漂う街になった。

観光地として栄え、チャイナタウンが現在の様相とバイタリティを有しているのは、絶えず挑戦を乗り越え、そして新しいエネルギーを注入してきたからに他ならない。絶え間ないハングリー精神と、発想の転換力、そして新しい状況に対応する柔軟性が求められる。ここでは一つの例を紹介したい。屋台と食べ歩きについてである。

現在、チャイナタウンに行く人たちの楽しみの一つに、いろいろなものを少しずつ楽しむことができる屋台での食べ歩きがある。安価で手ごろなものも魅力的だ。しかし、チャイナタウンはもともと屋台があったわけではない。むしろ、食べ歩きは中国人には嫌悪感をもたれる行為でもあった。しかし、チャイナタウンで食べ歩きが増えたのには、日本独自の理由があった。それは、阪神大震災である。

阪神大震災以前にも、祭りやイベントの際に屋台を出すことはあったが、それ以外の時はあまり出されることはなかった。しかし、震災が起こった1995年以降、神戸チャイナタウンでは本格的に屋台が増え、街の特徴ともなった。

阪神大震災によってチャイナタウンも被害を受けた。災害の時は、なによりも食料の供給が重要となる。チャイナタウンは食べ物の宝庫である。近くの人たちで食料を持ち寄り、プロパンガスで餃子やおかゆなど暖かい中華の炊き出しをした。冬の寒い時だった阪神大震災の被災者約3万人が、心身ともに癒された。関東大震災の時は、中国人や韓国人が虐殺されたという悲惨な事件が起きたが、阪神大震災ではむしろ多民族・多文化共生の意識が広まった。

震災後、ガスなどライフラインは完全にストップし、街や店が完全に復興するまでしばらく時間がかかった。店内での通常営業は不可能であったなか、それでも生きていくために稼がねばならない。被災者意識でいじけたままではどうにもならないのである。料理店

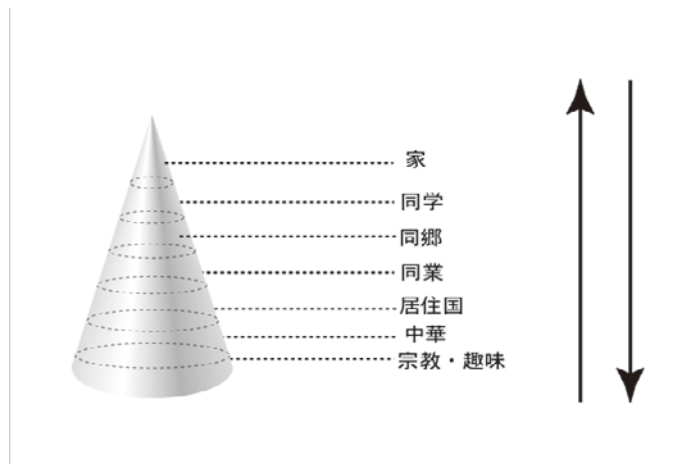
の店主たちは、材料を持ち出しプロパンガスで調理し屋台で商売をした⁹。

マスメディアなどでも、神戸チャイナタウンの復興のシンボル、そして多民族・多文化共生のシンボルとして、屋台が取り上げられた。その影響もあり、屋台の数は飛躍的に増えた。それは神戸だけでなく、長崎や横浜など日本にある他のチャイナタウンへも波及したのだった。

多文化をつなぐ移民

チャイナタウンの主役でもある、華僑・華人たちは移民である。移民である彼らをどう見ればよいのか。ここでは、再度、前に述べた「虹のメタファー」を用いたい。1人の人を円錐として捉えるとよいだろう。円錐をいくつかの層に分け、上から家、同学、同郷、同業、居住国、中華、宗教・趣味のように人の持つ世界やつながりを分類する(図7)。1人の人間のなかにはいろいろな所属がある。注意

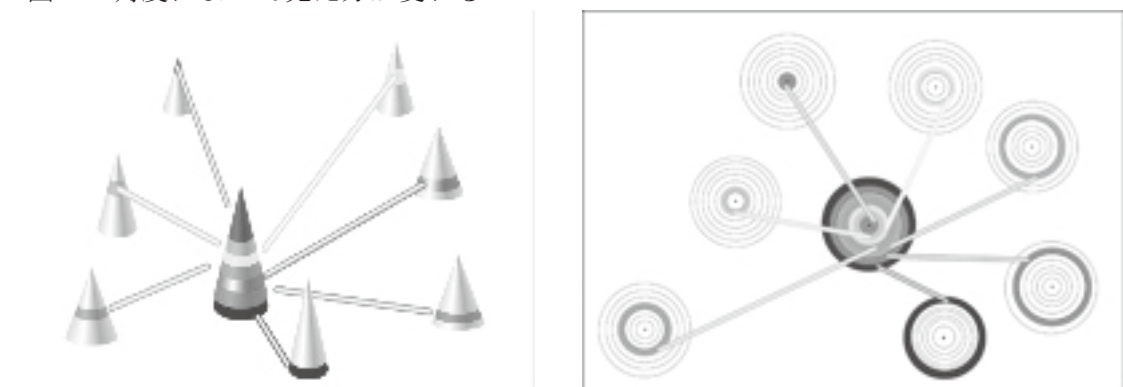
図7 華僑・華人のアイデンティティと世界



しないと個人を一つの色やアイデンティティで構成されていると見てしまいがちであり、その人全体が他者とつながっているように見えてしまう。しかし、実は一人の人はいろいろなアイデンティティ・カードを持っていて、時と場合によってそのアイデンティティ・カードを使い分けている。華人はしばしばチャイニーズ同士、中国的なアイデンティティでつながっていると見られがちだ。しかし、実は住んでいる国の人、例えば在日華僑であれば日本人とも交流はあり、留学した経験があれば留学先で知り合った同じ専門業種の友人ともビジネス上交流があるのが実情だ。その国においてマイノリティである分、ほかのところでいろいろと自分の生存空間を拡大している。

人には多重のアイデンティティがあって、その人の見え方も、角度によって変わる(図8)。それは7色の虹にたとえられる。虹は一つに見えるが、多層の色で構成され、また角

図8 角度によって見え方が変わる



⁹ 陳天璽「危機を機会に変える街—チャイナタウン」『現代思想』2007、vol.35-7、84-94頁参照。

度によって見えたり見えなかったりする。また「架け橋」という意味でも華人と虹は共通性を持っている。多様性を持っているのが華僑・華人たちの実体で、そういった面を認識すること大切だ。日本社会は日本にいる華僑・華人を外国人とかマイノリティとして部外視してしまうのではなく、彼らを自分のメンバーとして取り込み、いかに彼らの華人ネットワークを日本の多文化共生社会の構築に利用すればよいかを考え、実践することができれば、それは日本の国力にもつながるだろう。

多文化共生と「虹のメタファー」

多文化共生社会という構想は、とりあげられて久しい。この考えは基本的には、日本なら日本、アメリカならアメリカなど、ひとつの社会を母体とし、そのなかにいるいろいろな民族グループ、そして、それぞれのエスニック・アイデンティティを持った人たちが、互いの文化的違いを認め合い、それぞれの文化を大切にしながら共生することを目指している。つまり、文化の固定性が前提となっている。一方、本論で筆者が提示している「虹のメタファー」は、社会のなかにさまざまな人がおり、その個々人のなかに多様な文化やアイデンティティを内包していることに注目している。アイデンティティの多様性は、他者にはなかなか見えづらく、場合によってはイメージや偏見によって民族的で排他的なイメージが強調されやすい。しかし、見方を変え注意を払ってみてみると、個々人は場所、相手、目的に応じて身分やアイデンティティ・カードを使い分け、他の民族グループや同業者などと共存する術を模索していることがわかる。これは本論で挙げた華人やチャイナタウンの事例から確認することができた。つまりは、移民が持つアイデンティティや文化の可変性を前提とし、彼らの柔軟性や可変性によって構築される多文化社会を見ているのだ。

移民は、移動するというその生態から、文化やアイデンティティが変容しやすい立場にある。本論で挙げた華僑・華人やチャイナタウンの事例を通し、いかに多文化共生社会における虹をより多く構築することができるか、そしてそれが意味する多文化共生の真意を理解してもらえれば幸いである。

<参考文献>

陳天璽『華人ディアスポラ—華商のネットワークとアイデンティティ』明石書店、2001。

陳天璽「危機を機会に変える街—チャイナタウン」『現代思想』2007、vol.35-7、84-94頁。

西川武臣・伊藤泉美『開国日本と横浜中華街』大修館書店、2002。

森田靖郎『華人資本主義の衝撃』PHP、1995。

その他

(CHEN, Tienshi/Waseda University)